

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

| 学校経営方針（中期経営目標） | 前年度の成果と課題 | 本年度学校経営の重点（短期経営目標） |
|--|--|---|
| <p>校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践することにより、自分の頭で考え、人と協働し、新たな価値を創造する人を育成する。そのために、</p> <p>① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。</p> <p>② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。</p> <p>③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。</p> <p>④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。</p> | <p>◇ 生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たした。今後は主体的・自立的に学習し挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る必要がある。</p> <p>◇ 難関大学進学に向けた組織体制の確立や学習・進路指導の展開により、生徒の進路実現に顕著な成果がみられた。</p> <p>◇ 学校行事の内容充実をはじめ、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒の主体的な活動が定着しつつある。</p> <p>◇ 生徒・保護者アンケートに基づき、冷暖房の運用基準や部局活動時間を見直すとともに、トイレの洋式化や中庭改修等の学校施設整備に取り組んだ。今後は物心両面において安心して教育を受けられるための環境づくりに努める必要がある。</p> <p>◇ 他校に先駆けて働き方改革に係る具体的な取組を進めてきた。今後は長時間労働の解消はもとより、「働きやすさ」や「働きがい」を感じつつ、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりが求められる。</p> | <p>① 個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法の工夫改善やICTの利活用等、学習指導の充実のための研究・実践を行う。</p> <p>② 難関大学進学に向けた取組の充実を図り、効果的な学習・進路指導を展開する。</p> <p>③ 4つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）を継続し、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。</p> <p>④ 校内連携のさらなる強化により、中高一貫教育の効果的な実施と計画的な準備を進める。</p> <p>⑤ 内外の評価を活用し、生徒一人一人を大切にし、個性や能力を伸ばせるよう、学習者起点による学校の魅力化を図る。</p> <p>⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を継続して進める。</p> |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|--|----------------------------|--|-----|----|---|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項目 | 総合 | |
| 教務部 | 教育課程、学習内容の充実のための研究・実践を行う。 | ICTを活用した個に応じた学習内容の提供(アダプティブラーニング)について研究・研修を行う。 | B | B | ICT利活用の機会は増え、利用した学習内容の全体への周知もできた。今後、更なる活用の深化を図っていきたい。中高一貫教育について、中学校担当者会議を通して、課題を共有して改善に向けて協議することができた。 |
| | | 教科主任会議を充実させ、思考力・判断力・表現力を育成するための授業の実施に向けて、その指導方法の研究・実践を行う。 | B | | |
| 6年間を見通した中高一貫教育及び次期学習指導要領を踏まえた教育課程・開講講座の研究・準備を行う。 | | B | | | |
| | 総合的な探究の時間について研究を行う。 | 教科主任会議等を通して、教科横断的な総合的な探究の時間の在り方について研究・検討を行う。 | A | A | 総合的な探究の時間について、教科主任会や教科会議を通して実施形態、内容等の協議をすることができた。その中で見えてきた課題を一つ一つクリアすることで、生徒の探究活動を充実したものにしていきたい。 |
| 生徒指導部 | 生徒の主体的な活動の拡充を図る。 | 生徒主体の効率的かつ合理的な活動ができるよう部局顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。 | B | B | 文化祭の地域コラボ企画に於いて、昨年度の課題点を着実に改善することができ、地域との連携がより一層充実したものとなった。附属中学校の生徒会を発足させた。 |
| | | 学校行事における生徒の活動を充実させると共に前年度におこなった地域との連携をさらに強化・拡充する。 | B | | |
| | | 生徒会を中心とした校内外の活動を支援する。 | A | | |
| | 中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。 | 全教職員体制で生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制作りをおこなう。 | B | B | 生徒観察シートを用いて生徒の状況を共有することに努めた。今後は、それらの情報を効果的に活用する方法を構築してゆきたい。生徒指導事案について関係教員を連携し早期に対応することができた。 |
| | | 学齢に応じた重層的かつ効果的な指導をおこなうと共に、協同的活動を支援する環境を構築する。 | B | | |
| | | 生徒指導事案が発生した際は、関係教職員との連携を迅速におこなうとともに情報共有を円滑におこなう環境を構築する。 | A | | |
| 進路指導部 | 個に応じた学習指導の充実のための計画・実践を行う。 | 長期休業中の進学講習の内容を教科・学年と調整し、学習者起点の講座選択を実施する等個々の生徒のニーズに対応した効果的な学習指導を実践する。 | A | B | 進学講習や模擬試験について各教科・学年と連携しながら、学習者起点で計画・実施できた。生徒のニーズの掘り起こしが課題である。自習室開放日や平日の自習室の管理・運営を全校体制で実施した。次年度の運営方法について改善する。ICTの利用について工夫が必要である。 |
| | | 土曜日の自習室開放を有効的に活用できるように校内の組織体制を整える。 | B | | |
| | | チーム・ガリレオでのICTを利用した主体的学習について実践・研究を深め、生徒の実態に応じた学習指導法を工夫・改善し、学校全体の学習指導に広げる。 | B | | |
| | 難関大学進学に向けた学習指導・進路指導の充実を図る。 | 難関大学進学に向けた学習集団(チーム・ガリレオ)を充実させ、主体的・自立的に学習に取り組む姿勢をもち、挑戦し学び続ける生徒を育成する。 | B | B | チーム・ガリレオは1・2年生を中心として交流・活動し、主体的な学びを促した。効果的な指導方法について学年部・教科の協力を得ながら工夫・検討が必要である。学年会への参加を増やし、学年団との連携を深めることができた。附属中学校の進路指導体制についての検討を継続する。 |
| | | 学年会や進路検討会(第3学年)をとおして各学年団との連携をさらに深め、学習指導・進路指導の協働体制を強化する。 | B | | |
| | | 附属中学校の生徒に対し、海外大学進学を視野に入れた進路指導体制の確立に向け研究・実践を行う。 | C | | |
| | 各模擬試験データの共有と分析を行う。 | 各模擬試験データを進路指導部内で分析し、情報を教員間で共有化するとともに、部長会や教科主任会で以後の進路指導についての協議・提案を行う。 | B | B | 部長会や教科主任会を通じて教職員への情報提供はできている。次年度は模擬試験等のデータ分析を充実させるとともに、情報の共有について改善を行う。システムの利用についての情報は随時提供できた。個人の利用率と分析力の向上に努める。 |
| | | FINEシステムやデジタルサービスの活用により、学級担任・教科担当者レベルでの分析を充実させ教員集団としての情報分析力を高める。 | B | | |

A: 十分達成できている。 B: ほぼ達成できている。 C: 達成できているとはいえない。 D: ほとんど達成できていない。

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|--|---|---|--------|---|---|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項 | 総合 | |
| 保健部 | 健康教育を充実させる。 | 全学年で健康教育を実施し、中高6年間を見通した健康教育を計画する。 | A | A | 全学年で健康教育を実施することができた。今年度の実施を踏まえて附属中学校から高校までの6年間の計画を立てることができたので、学年の実態に応じた内容になるように工夫していきたい。 |
| | 支援を要する生徒への組織的な対応を進める。 | 学年団、担任、教科担当等の情報共有を図り、早期の対応を支援する。 | A | B | 日常的に些細なことも情報を共有できたので、今後も引き続き行っていく。特別な支援を要する生徒のため組織的な対応ができるよう準備を進めていく。 |
| | 生徒の積極的な活動の充実を図る。 | 保健所と協力して、「世界エイズデー」の取組を実施する。 美化活動に関するルール遵守の啓発活動を実施する。 | A A | A | 「世界エイズデー」に関わる啓発活動を実施することができた。ポスター作成やグッズの配布により生徒が発信することで、AIDSについての知識や理解を深めることができたと思う。美化活動の啓発がより充実したものになるよう検討していく。生徒の自主的な取組が進められるよう、年度当初の指導を工夫していきたい。 |
| 図書部 | 図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。 | 「広報」班に図書館や他の班の活動を積極的に取材させ、図書委員会だより「F.I.B」を学期ごとに発行させる。 | B | B | FIBは定期的に発行しているが、取材を充実させていきたい。イベント「読書ビンゴ」は好評だったが、参加者を増やしていきたい。 |
| | | 「イベント」班を通じて、一般生徒の図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりの一助とする。 | B | | |
| | 教科との連携を深め、授業での図書館利用と、教科に関連した図書の貸し出しを増加させる。 | 授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。 | B | B | 国語科・芸術科・サイエンス研究などとの連携はある程度できているが、他教科ともさらに連携を深めていきたい。 |
| | | 新聞や教科内容に関連した新書を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。 | C | | |
| 読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。 | 生徒や教職員による「ビブリオバトル」を実施し、府大会などの出場にもつなげる。 | A | B | 生徒のビブリオバトルを実施し、本校代表者が京都大会で優勝し、全国大会に出場した。1BOXも、定期的に開催しているが、教職員にいろいろなテーマを依頼して、さらに充実させていきたい。 | |
| | 多様なテーマの展示を行うために、「1box」コーナーの作成をさまざまな教科の教員に依頼する。読書活動啓発のために、「フィブレット」を作成する。 | B | | | |
| 企画研究部 | 生徒・教職員の人権意識と実践の深化を図る。 | 教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。 | A | A | 教職員・生徒の人権意識を、適切な時期に研修や人権学習を実施することで高めることができた。地域の学校や外部機関等と交流を図ることでさらに深めることができた。国際交流活動では生徒の主体的な取組を実施することができた。今後は授業等を通してさらに意識を高めるよう人権教育の推進を図る。 |
| | | 生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を企画・実施する。 | B | | |
| | 情報発信においてICTの利活用を図り、その効果を検証する。 | ホームページやSNS等を利活用し、動画など新たなツールを利用した情報発信を適宜企画・実施し、その効果を検証する。 | A | A | ホームページやSNSなどを活用し、学校行事や日常の様子を適宜発信できた。また、動画コンテンツによる本校の特色ある教育活動を発信できた。より効果的なICT利活用と効果について今後さらに検証していきたい。 |
| SNS等を利活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施し、その効果を検証する。 | | B | | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|--|--|--|-----|---|--|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項目 | 総合 | |
| 事務部 | 主体的、積極的に学校運営に参画する。 | 事務の専門性を生かしつつ、各部と調整しながら効果的な学校運営が行われるよう努める。 | B | B | 限られた予算の中、物品購入について、今後も更なる精査が必要である。 |
| | | 限られた予算の中、各教科領域との調整、協議を深め、精査し、物品購入、整備を行う。 | B | | |
| 事務部 | 校内の安心、安全、美化を推進する。 | 危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手すると共に、環境美化に繋げる。 | B | B | 床面の木目の損傷が激しい格技場について、床改修を行い、事故防止に繋げることが出来た。今後も危険箇所について、計画的に改修を進めていく。壁の損傷が激しい理科棟教室等について、壁塗装を行い、環境美化に繋げることが出来た。 |
| | | 文化祭、体育祭、学年行事への主体的な参加を呼びかけ、互いに信頼できる仲間づくりをさせる。 | A | A | 部活動や行事を通じて、それぞれに成長が見られた。コンテスト等にも積極的に挑戦するよう呼びかけ、多くの生徒が参加した。今後も生徒の活動の場を広げる取り組みを多く用意したい。 |
| 第1学年部 | 自立した高校生となるための土台として、基本的な生活習慣を身につけさせる。 | 挨拶を励行し、ルールやマナー、とくに他者を思いやる心の大切さを語りかける。 | B | B | 「慣れ」が出て、ルールの徹底が不十分になる部分があった。生活を自ら振り返り改善する必要がある。引き続き生徒が納得できるように話し、自己管理の意識を高めさせることにつなげたい。 |
| | | 生活記録表などを活用し、自己管理の意識を持たせる。 | B | | |
| | 主体的に、かつより高い目標に向かって学習に取り組む姿勢を身につけさせる。 | 授業を大切にさせるとともに、模擬試験などを利用して、発展的な学習を行うことを促す。 | B | B | 授業態度はまじめであるが、まだ受け身の姿勢である。個々の力に対応した指導方法を工夫し、発展的な学習を行うように促していきたい。ポートフォリオをしっかりと作らせることも課題である。 |
| | | 進路指導部と連携し、自己の進路について考える機会をつくるとともに、学期に1度は面談を実施して、進路への意識を高めさせる。 | A | | |
| 学校行事などに積極的に参加させ、充実した学校生活を送らせる。 | 文化祭、体育祭、学年行事への主体的な参加を呼びかけ、互いに信頼できる仲間づくりをさせる。 | A | A | 部活動や行事を通じて、それぞれに成長が見られた。コンテスト等にも積極的に挑戦するよう呼びかけ、多くの生徒が参加した。今後も生徒の活動の場を広げる取り組みを多く用意したい。 | |
| | 部活動、国際交流、ボランティア、コンテストへの参加を奨励し、生徒の活動の場を広げる手助けをする。 | A | A | | |
| 第2学年部 | 自立した生活習慣を確立し、学校の中核となる2年生としての自覚と自負を身につけさせる。 | 手帳を用いて日々の生活リズムや学習習慣を自己管理し、よりよい学校生活を送る手立てを自ら考え行動する力を身につけさせる。 | C | B | 基本的な生活習慣は少しずつ確立されてきたが、挨拶や身だしなみについてはまだまだ個人差があり、継続した声かけが必要である。3年生に向けて自己管理能力を身につけさせていきたい。 |
| | | 挨拶や身だしなみなど、学校全体の範となる集団作りができるよう、毎学期学年集会などを行い、さまざまな教員から語りかけることで意識を高めさせる。 | B | | |
| | 日々の学習に主体的に取り組むと共に、進路目標を定め、その実現に向かって確かな一歩を踏み出させる。 | 毎日の予習・授業・復習のサイクルを確立させるために、教科担当と担任団の連携を密にし、個々の生徒に応じた指導を行う。 | B | B | 担任による面談やLHRなどを通して、進路意識を高めることができた。教科担当との情報共有も継続して行った。3年生に向けて進路を見据えて学習に取り組む雰囲気、学年全体で作り出していく必要がある。 |
| | | 進路指導部と連携して進路に対する意識を高める取り組みを行うと共に、毎学期1度は担任面談を行い、個々に寄り添った進路指導を行う。 | B | | |
| | 学校行事を通して集団を高めると共に、それぞれの生徒に自己実現を図らせる。 | 研修旅行や学校祭などの行事に主体的に取り組む中で、大きなことを仲間と協力して成し遂げることで、自己肯定感を感じさせる。 | A | A | 行事等を通じて集団意識を持たせるとともに、個々の活躍の場を設ける中で、主体的・意欲的に取り組む姿が見られた。ここからさらに、敷かれたレールに依らず、自ら開拓していく力をつけさせたい。 |
| さまざまな行事や日々の生活を通して、互いの個性を尊重し合える豊かな集団作りをさせる。 | | A | | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|-------------------|---|---|-----|----|--|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項目 | 総合 | |
| 第3学年部 | 社会に通じる人として、規範意識の醸成と他者を思いやる心を養う。 | 安易な欠席に対する指導を行い、マナーを守らせることで規範意識の醸成を図るとともに、最高学年としての自覚を持たせる。 | B | A | 学校行事などに積極的に取り組ませることで、最高学年としての意識を高めさせ、規範意識の高揚を図った。進路希望の実現に向けてプレッシャーを感じる生徒も多かったが、前向きな姿勢で取り組むことができた。 |
| | | 挨拶の励行や、日々の授業・学校行事等の取り組みを通じて、相手の立場を思いやる心を育成する。 | A | | |
| | 進路目標の決定と、希望進路実現に向かって学び続ける学習習慣を身につけさせる。 | 模試の結果などから個々に応じた面談を設定し、希望進路の実現に向けてサポートする。 | A | A | |
| | | 他分掌との連携を密に行い、学校行事・LHRを通して主体的に学習に取り組む姿勢を身につけさせる。 | A | | |
| サイエンスリサーチ科 | サイエンスⅠ・Ⅱ・研究を、より生徒の主体的な探究活動として後押しし、探究内容のレベルアップを図る。 | 教科主任を中心に各教科と連絡を密にとり、全校体制で取り組む。 | B | B | 日頃の探究活動はサイエンスリサーチ科と担当者・教科と連絡をとり進めることができた、一方、中身については外部機関等を積極的に活用するなどして、より深い取組とする余地は十分にある。また、成果を研究会や学会、論文としての投稿等、外部での発表・発信をよりすすめていきたい。 |
| | | 大学や関西文化学術研究都市の研究施設等との連携を図り、より深い取組の内容とする。 | B | | |
| | | 探究活動の成果を研究会や学会等の外部の場で発表する。 | B | | |
| | | 学年の垣根を越えた交流を積極的に持ち、学び合いの効果等も活用し、主体的な探究活動を後押しする。 | A | | |
| 附属中学校 | 特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。 | パナソニック教育財団に申請した実践計画「『学びのアトリエ』と「つなぐ展示」によるSTEAM教育の充実化と国際展開～学びの表現活動と多様な他者との相互鑑賞による触発の連鎖に向けて～」を2年間にわたり、全校体制で推進する。 | A | A | パナソニック教育財団から特別研究指定を受け、1年目の取り組みに関して、8月、12月に活動報告を行った。また、令和2年2月に全国研究発表大会を開催し、1年間の成果発表を行った。複数の教科で、電子黒板やタブレットを活用した授業が展開されており、生徒のメディア活用力の伸長につながっている。 |
| | | 超スマート社会に対応するため、学校教育の枠組みで実現できるICT活用授業を研究する。 | A | | |
| 国語科 | 新しい学習指導要領や高大接続改革に対応できるように授業改善を行う。 | ICTを活用した授業実践を行い、その実践を教科で共有して、効果的な活用方法を検討する機会を設ける。 | C | B | 言語活動を充実させることができた。次年度以降、ICTについては教科全体として活用に向けて取り組んでいく必要がある。 |
| | | 主体的に思考し、表現できるように、生徒に自分の考えを表現させる機会を設けるなど、言語活動の充実を図る。 | A | | |
| | 言葉の持つおもしろさを生徒に伝え、言葉を楽しむ精神を育てる。 | 生徒の知的好奇心を高める授業を展開することで、国語力向上につなげる。 | B | B | 教材に関係する書籍を紹介したり、ビブリオバトルを行って読書に関心を持たせたりすることができた。 |
| | | 読書を幅広く推奨し、生徒が多様な視点を獲得できるようにする。図書館を活用する。 | B | | |
| | 中高一貫を見通した指導を行い、また、組織的な教科指導力を高める。 | 附属中学校での授業実践を教科で共有、検証する機会を設け、改善につなげる。 | C | C | 授業実践や指導の成果の共有が不十分であった。中高一貫を見通した指導については、今後さらに実践事例や指導の成果を蓄積していく必要がある。 |
| | | 個々の教員が難関大学の入試問題を研究し、その成果を教科で共有して、生徒の進路実現につなげる。 | C | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|-------------------|---------------------------------|---|-----|----|--|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項目 | 総合 | |
| 地歴・公民科 | 主体的・対話的で深い学びを実践し検証する。 | 主体的・対話的学びの評価方法について昨年度から引き続き検討し、適切な評価ができていくか継続的に検討する。 | B | B | 主体的・対話的で深い学びについて、教科会議で研修等の報告を行い、情報を共有することができた。 |
| | | より効果的な主体的・対話的で深い学びについて教科で検討する。 | B | | |
| | 附属中学校の教育課程について検証・改善を行う。 | 附属中学校において昨年度実施された教育課程について検証・改善し、改定した教育課程を策定できるようにする。 | B | B | 高校での指導経験に基づき、高校の学習を見据えて、授業内容を精選し展開することができた。 |
| | | 附属中学校の教育課程について、今年度の状況も踏まえながら、高校の指導内容との整理・統合を図る。 | B | | |
| | 新しい学習指導要領や大学新入試を踏まえた授業改善を行う。 | 新入試の傾向を教科会議で分析・共有し、指導内容を検討する機会を学期ごとに設ける。 | B | B | 検討する機会を設けることはできた。更に議論を深めていく必要がある。 |
| | | ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を共有、検討する機会を学期ごとに設ける。 | B | | |
| 数学科 | 個々の数学力を高める指導方法を確立する。 | 個に応じた適切な学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、知的好奇心をくすぐるなど、個々の数学力がより向上するような高度で格調高い授業を展開する。 | B | B | 各単元にグループ学習を取り入れるなど相互の学び合いを深める授業ができた。生徒の数学力を高めるための指導体制を教科として検討していく必要がある。また、主に文系生徒の数学力を培うことが課題である。今後も担任との連携をより密にとっていく。 |
| | | 希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、希望進路が実現できる数学力を培う。 | B | | |
| | | 日頃から担任と密に連携を取り、必要に応じて教科担当者の立場で生徒と個別に面談等を行う。 | A | | |
| | 数学を楽しみ、探究する精神を育成する。 | 学年や実態に応じて、生徒が主体的に学び合えるような教材や指導法を教員間で共有し、実践する。 | B | B | あらゆる学力層が数学を楽しみかつ学力を定着させる手立てを教科で検討し、共有する。中学校ではICT機器の活用により幾何問題を視覚的に理解することができた。高校でも積極的に取り入れるために教員間での情報共有を密にする。教科としてICT活用により、やること・できることを明確にする。また、担任と連携し、積極的にコンテスト等への呼びかけを行った。 |
| | | 効果的にICTを用いることで、個々の生徒の数学力が向上するような教材及び主体的に授業に参加できる教材の開発を行う。 | B | | |
| | | 京都・大阪数学コンテストを始めとするコンテスト及び数学検定などへ生徒が主体的かつ積極的に参加するような学習指導や、数学の魅力・面白さが伝わる仕掛けを行う。 | B | | |
| | 中高一貫を見通した指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。 | 6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、同じ講座を担当する教員が交流する場を週1回以上設定するとともに、相互に授業見学を行うなど開かれた授業を目指す。 | C | B | 互見授業等を通して教員の指導力向上に努めるとともに、中学校と高校の授業交流を増やすことで6年教育についての手がかりとしたい。他校のカリキュラムを参考に、教科としての独自の6年教育の研究が必要である。教科会議等をうまく活用し、難関大学を中心とした入試問題研究を共有する機会を設ける。中学校では教科横断型の授業をいくつか実施でき、今後も教科外の教員とも交流を図りたい。 |
| | | 個々の教員が難関大学を中心とした大学別及び分野別の入試問題研究を行い、その成果を教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた進路指導に活用する。 | B | | |
| | | 数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。 | B | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|---|---|---|-----|----|--|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項目 | 総合 | |
| 理科 | 個々ならびに組織的な教科指導力の向上を目指す。 | 6年間を見通した中高一貫教育における理科教育課程を実践し、組織的な指導体制の構築をはかる。 | B | B | 中高一貫校としての強みを活かして、中学生が高校レベルのより専門的な知識・経験をえられる環境が構築されている。中学生3学年がそろ次年度、効果的に高等学校に接続できるように、6年間を見据えた教育課程を実践する。高等学校普通科の総合的な探究活動の取り組みについて、効果的・実施可能な形態・方法の検討が必要である。地域・企業・大学との連携は好調である。個の学力に応じた効果的な学習課題を提供する指導体制を充実させる。 |
| | | サイエンスの活動や附属中学校におけるダ・ヴィンチの取組やコンテスト等への参加に加えて、先行実施する高校普通科の探究活動の取り組みを通して、地域の企業や大学とつながり、興味をもって主体的・自立的に学ぶ生徒を育成する。 | A | | |
| | | 科目主担当を中心にして模擬試験の結果等を分析・検討し、生徒の学力や課題を共有して学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する生徒を育成する。 | B | | |
| | 新学習指導要領に対応して、ICT活用の充実を図る。 | 個に応じた学習内容の提供及び思考力・判断力・表現力を育成するために、ICTの効果的な活用法をさぐり、各々の実践研究を教科内で共有する。 | B | B | 中学・高校の双方の授業においてICTが積極的に活用されている。今後は生徒用のタブレットの活用について更に研究する必要がある。ICT活用希望の授業が増えてきているので、ICTの利用できる教室を増やしていく必要がある。 |
| 事務部をはじめ各分掌や他教科と連携・連動して、効率的にICT利用のできる校内の学習環境整備を提案する。 | B | | | | |
| 保健体育科 | 卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。 | 自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。 | B | A | 活力ある生活の土台となる体力の向上にさらに取り組む必要がある。高校において、学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた全講座8種目(2年SRのみ4種目)選択制授業を実施していく。生徒の自主的・主体的な取り組みを促すためにもさらにリーダーの育成を求めていく。 |
| | | 運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。 | A | | |
| | 現代における健康課題について知識、理解を深める。 | 課題学習の研究を進めることにより、現代における健康課題を幅広く考える視点を養う。 | A | A | 課題学習におけるテーマ設定場面において深く考えさせ、質を高める必要がある。教科書の内容だけにとどまらず、社会の実情に即したタイムリーな課題を提起していく。 |
| | | 薬物乱用について正しい知識を身につけ、適切な行動をとることができる態度を養う。 | A | | |
| 芸術科 | 表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる。 | 中学校との関連をふまえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。 | B | B | 芸術の諸要素を感受し自己の表現を追求する姿勢を醸成する事ができた。鑑賞領域に於いて、他者の感想や意見を共有する場を作ることができた。 |
| | | 鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。 | B | | |
| | 自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。 | 日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感受させ、自ら表現することができる力を養う。 | B | B | 基本的な表現技法、演奏技能を育てる事ができた。個々に応じた適切な指導を行うことができた。 |
| | | グループ発表・学習をおこない、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。 | A | | |
| | 生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む。 | 教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。 | B | A | 適切な教材・教具を活用し、横断的な授業を展開することができた。様々な研修を受け自己研鑽に努めた。「聴く・観る・話す」を強く意識させ、自己の内にある表現を「外」に表出させる授業が展開できた。 |
| | | 学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。 | A | | |
| 多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める。 | | A | | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|-------------------|--|--|----|----|---|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項 | 総合 | |
| 英語科 | 基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒の学力の伸長を実感させる。 | 学習の仕方を具体的に指導し、日常的に家庭学習に取り組み、学年に応じた自学 自習の習慣を身に付けさせる。 | B | B | 個々に課題設定をさせ、個別指導により、長期的な取り組みができた。今後も主体的な学習につながる指導を継続していく。昨年度からオンライン教材を導入しているが、家庭学習で積極的に取り組ませる方法を引き続き検討する必要がある。 |
| | | 生徒個々のレベルと目標に応じた指導をより効果的にするために、個に応じた学習 内容を提供し、個別指導を取り入れる。 | B | | |
| | | 教科書準拠のオンライン教材活用について研究・実践を進める。 | B | | |
| | 英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。 | 生徒が使える語彙指導の充実を図る。 | B | A | |
| | | 発音指導や音読指導を中心に人前で英語を話すことに慣れさせる。 | A | | |
| | | 授業で学習した内容に対して、自分を意見を持ち、英語で書いたり、話したりする機会を多く取り入れる。 | A | | |
| 家庭科 | 生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。 | 家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践を通して課題を解決する力を養う。 | A | B | 成人年齢の引き下げを意識した授業内容の充実に努めた。次年度もさらに教科内容を充実させていきたい。環境教育や食生活分野において、生徒の家庭における取り組みや復習の機会を大切にすることができた。今後も継続していきたい。 |
| | | 家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。 | B | | |
| | | 生徒の主体的・協働的な活動を通して、特に防災教育や消費者教育を充実させる。 | B | | |
| | 中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。 | 特に中学校についての研修を深めると共に、高校についての見直しも行う。 | A | B | |
| | | 他教科や学校行事等との連携による主体的・発展的活動を行う。 | B | | |
| | | 研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。 | B | | |

平成31年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)

| 評価領域 (分掌・教科領域) | 重点目標 | 具体的方策 | 評価 | | 成果と課題 |
|-------------------|---|---|----|---|--|
| | | | 評価 | | |
| | | | 各項 | 総合 | |
| 情報科 | 情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を身に修得させる。 | 情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。 | B | B | 情報を科学的に理解させ、それを有効に利用できる技術や考え方を身に付けさせることができた。また、問題が発生した場合の解決方法など学ばせた。 |
| | | 将来、必要とされるコンピュータリテラシーを習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。 | B | | |
| | 情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。 | インターネット、電子メールや携帯電話などの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。 | B | B | 情報機器の利便性を理解させるのと同時にその危険性も理解させることができた。また、著作権について詳しく学び、その保護の重要性を学んだ。 |
| | | 著作権保護の重要性を理解させる。 | B | | |
| 教員の指導力を向上させる。 | 情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。 | B | B | 授業の進め方及びITのあり方について、反省を行い、改善策を考え、その実施のための準備を行っている。また、プログラミングについては授業に取り入れることは、来年度実行するまでには至っていないため、検討を重ねていきたい。 | |

| | |
|-------------------------|--|
| 学校関係者 評価委員会 による評価 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人の学力向上に向けた、様々な教育活動をととして、生徒の希望進路実現につながっている。 ・生徒の主体性を育む様々な教育活動を進めることができている。文化祭や地域の行事への参加をととして、生徒の社会参画の機会があり、地域に開かれた学校作りが進んでいる。 ・関西学研都市の研究機関や大学・企業等と連携した特色ある教育活動が展開されており、最先端の研究にふれる機会をさらに充実していくことが期待される。 ・新しい時代を見据え、長期的な視野で生徒一人一人の創造性を育む教育をこれからも一層進めていくことが期待される。 |
|-------------------------|--|

| | |
|-----------------------|---|
| 次年度に 向けた改善の 方向性 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の創造性を育み、思考力・判断力・表現力を育成するための指導方法や、様々な学びのニーズに合わせたICTの活用についての実践・研究を一層進めていく。 ・生徒の希望進路実現に向けた取組をさらに進め、きめ細かな学習・進路指導を展開して、生徒一人一人のさらなる質の高い学力の向上を目指していく。 ・4つの奨励(部活動・国際交流・ボランティア・コンテストへの取り組み)をさらに進め、国際交流や生徒の社会参画の機会等をととして主体性を育む教育活動の一層の充実を図る。 ・地域の研究機関等との連携を一層進めるとともに、新しい時代に対応する中高一貫教育のさらなる充実を目指す。 |
|-----------------------|---|